

変わりゆく扇状地の風景—トゲウオのすむ川の昔と今

（“郷土財”の育成を目指して）

森 誠一 岐阜協立大学地域創生研究所

湧水はその源や湧出のあり方から外観的に2つに大別でき、扇状地扇端部の土砂堆積による起源のものと火山活動による起源のものがある。鳥海山や富士山をはじめとして日本は火山国であり、温泉が潤沢に出る地質的な仕組みを持っている。いわば、温泉は湧水の種類であるという観点からも、日本は湧水が頗る多いといえる。

また一方、日本の国土特性として山国という言い方がある。この山が多いことは、谷が多く川が多いことを意味する。それゆえに、その急峻な山の麓に川は土砂を堆積し扇状地をつくり、その扇状地下に伏流水を形成し扇端部に豊かな湧水が湧出する。こうした湧水環境は、わが国の大きな国土特性なのである。つまり、ここで問題にする湧水環境という観点は、例えば、お茶に使用すると味がよいか歴史的な伝承があるとかいう「名水」や、また静岡県柿田川のように滔々と湧出する湧水環境ばかりでなく、河川内伏流水が湧くワンドや集落を形成する要件となった扇端泉、谷津田にしみだす湧水なども包含する。残念ながら、伏流水の地下動態を含む湧水環境の研究は、さほど進んでこなかった。

しかも、これまで人間活動によって画一的な地域性を欠いた形で環境改変が進行した結果、個々の湧水状況が質・量ともに非常に危うい状況にあり、そこに生息する野生生物の絶滅の危険性が加速的に増大している。その改善・保全のためには、人為的な影響によって生息地が分断化された生物集団の置かれた現状を、重要な生息環境要件である湧水挙動や遺伝的多様性の維持の観点から掘り下げ、集団の絶滅リスクや実効的な保全対策を検討することが今後の課題である。

北半球高緯度地方に広く分布する本来北方系の魚種であるトゲウオ科は、特に本州産集団は夏季でも水温が $15\pm 2^{\circ}\text{C}$ で一定的な湧水の存在が生息条件となる。つまり、そのトゲウオの保全は湧水の保全とイコールである。しかしながら近年、地下水の過剰な汲み上げによる湧水の枯渇、湧水地の埋め立て・改修、水質汚染などの扇状地帯の開発事業によって、トゲウオの生息地は非常に狭められ、分断化・小集団化が急速に進行している。

本発表では、扇状地帯の湧水環境の変容に伴って、その特徴ある生物多様性の典型性としてトゲウオ科イトヨ属を中心にいくつかの事例をあげながら、課題と今後の方向性を紹介する。

その一つの事例として、福井県大野市の湧水環境とイトヨ生息の実態と保全活動について下記する。同市では、1931年に「本願清水イトヨの生息地」が国の天然記念物に指定されたが、市内全域で数十あったとされる生息地は、特に高度経済成長期に著しく減少した。その保全のため2001年に国指定天然記念物の「本願清水イトヨの生息地」が整備され、その際に隣接して郷土学習施設と位置づけられる「イトヨの里」が文化庁事業として設置され、市によって管理運営されている。現在、同施設を中心にイトヨおよび湧水の保全活動を地域文化として捉え、市民とともに湧水文化再生検討や水循環基本計画が市行政によって継続的に事業化されている。

同市のイトヨは元来、生息地周辺の人々の生活と深い関係にあった湧水とともに生きてきた淡水魚である。市内各地の生息場所は、イトヨを「湧き水のシンボル」として重要視した活動が実施されている。そうした活動を実施する人々が感得する「自然のざわめき」という認識や、そこで育成された歴史も、湧水環境の構成要素とすることができ、それを私は『郷土財』（＝郷土への思い入れをもつ地域特性の事物・事象）とよぶ。伏流水・湧水を含む水環境は人の生活を支え、地域文化を培う風土の重要な構成要素としても存在してきた。とすれば、今後の流域管理において、治水と利水や、おもに生物多様性を意味する環境に加えて、地域住民における環境・歴史・文化の特性への意識あるいは価値観も考慮の対象にするべきであり、それも合意形成の資料とすることが肝要となろう。おそらく、その住民の原風景となってきた湧水環境を守ることは郷土への思い入れを育成し、国土環境の保全へのシナリオに強く直結するものなのだろう。

かつて人々が体感して、その感性に織り込んできた「自然のざわめき」を、今、我々は取り戻す時期にきている。本講演では、「自然のざわめき」を人新世時代における“原風景”なるものの世代間ギャップを含め現代的な情勢の中で、いかに活動しているかを課題とともに提示する。最後に、こうした伏流水・湧水を基軸にした「まちづくり」を実践している全国の多様な主体が一堂に集まり情報交換し、さらなる交流を希求しつつ今後の互いの活動をいっそう深化する契機を目的とする「湧水保全フォーラム」の活動についても紹介する。